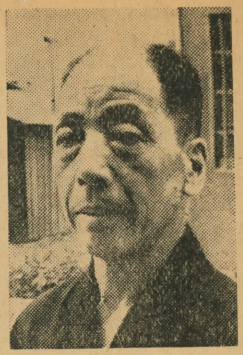


「堀川」の猿まはし

——文樂座・吉田兵次聞き書(下)——

吉田兵次

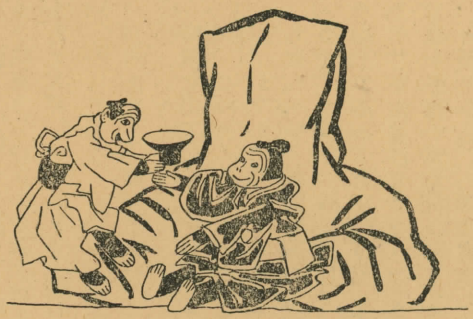
吉田兵次さんは文樂で「口上」を受持つてゐるのだから、各場毎に必ず勤めなければならない、その上に立ちまはりなどのツケも打つし、端場などの人形も遣ふおまけに衣裳方まで引きうけて、じつに三面六臂、正規の時間に辨當を食う間もないくらゐに忙がしい。だから「樂屋ばなし」も、おちついて聞いてはゐられない。遠い昔の思ひ出を「こうつと」と考へながら、ようやく話のいとぐちがほぐれ出すともう次の幕になつて「ちよつと待つとくなはれ」と言つて樂屋を出て行く、そして「東西ー ツ、このところ……」といふ口上が、かすかに聞えてくる。そのうちに「へい、お待ち遠さん」と言つて、つづきを話し出して、しばらくすると、また飛び出して行つて、こんどはガチン・ガチャンとツケを打つ音が聞える——といつた風だから、「樂屋ばなし」も、とぎれとぎれで前後不揃ひになるのは已むを得ない。だから根氣よく、日を重ねて斷片を集め、つづり合はせねば、まとまりがつかないことになる。その點、おふくみの上、讀んで頂きたい。

兵次さんの猿、「近頃河原達引」與次郎住居の段で、お俊と傳兵衛の心意氣、兄與次郎の心づくし、それらを猿の、あの滑稽な、そしていぢらしい姿で表はす技法は、わが兵次さんの獨壇場で、兩手で一匹づゝ遣ふ小さな猿ではあるが、しばらく劇の中心になつて、他のすべての役々を食つてしまふ偉大な存在になる。今度の「樂屋ばなし」は、そのコツを聞き出すつもりである。(上田芝有)

私は兵庫縣津名郡鮎原村の生れで、十四歳の時から小林六太夫座に入つて、人形遣ひの修業をしたことは、前に申上げましたが、そこで五年間修業して、十九歳の春に大阪の堀江座に勤めるやうになり、吉田兵吉さんの弟子になつて兵次といふ名前を頂きました。その時分に兄の紋五郎も、御靈文樂座で口上を言ふたり人形を遣ふたりしてゐました。この時分は今とちがうて、朝まだ暗いうちから幕があいて、はじめは三番叟、それから狂言も丸こ

かし、今で言ふ通し狂言で、果てるのが大低、夜の七時か八時になります。よつて一日十三、四時間も働らきつづけです。それで料金はと申しますと、かぶりつきで七錢といふ嘘みたいな値でした。

さて、堀江でしばらく勤めてゐますうちにそこが潰れたので、今の文樂座の前身の近松座へ替りました。當時はたしか四ツ橋土地會社とかいふ會社の經營で、建物も洋館づくりですから、御靈や堀江の昔風の小屋に慣れてゐた私たちは、どことなく勝手がちごうて、演りにくいやうな氣がしました。ことに、この口上といふやつは、べつだん誰に習ふといふこともなく、聞き覺えに、自分の工夫を加えてやるのですが、音の調子が大切で、それがうまい調子に出ぬと、ぶちこわしです。さあ、どういふ風にと聞かれても、口ではうまく說明ができまへん。この間も大阪歌舞伎座で、新國劇が「文樂」といふ新作物を演りましたが（同座六月興行、北條秀司作）その時口上もあつて、同座の方が習ひに來られましたが、どうも音の調子がうまいこと行かぬので、聞きに來て直してくれと言はれましたが、生憎私の方と出演時間がかち合ふので、到々よう行きませんでした、歌舞伎座と文樂とでは小屋の構造もちがひますから、文樂とはまた別の調子を工夫せねばならんやらうと思ひます。近松座のときも同樣で、御靈や堀江とは違つて洋館ですから、調子の張り具合に工夫が要りました。口上も妙なもんで、毎日同じことをくり返すだけですが、それでも、その日その日の氣分によつて、出來不出來があつて、私は四十年あまりも口上を言ふておりますが、それでも日によつてムラがございます。



さて、近松座も私が入つて暫くすると潰れてしまひました。堀江も近松座もこうして、次々につぶれたのでもう淨瑠璃も上つたりやと、嫌氣がさして、國へ歸つて、魚屋をやつたり、呉服屋をやつたりしました。でも、根が好きな道ですから、勸められると、またその氣になつて鄕里の吉田傳次郎座へ入りました。そして、さきに申しましたやうに、紀州路などの旅興行に出て「鳥づくし」や「魚づくし」の口合ひの口上などを言ふて、その土地土地の人たちにも可愛がられて、おもしろいこともあつて、毎年末には「場上り」といふて、國へ歸つておりました。

そうこうしてゐるうちに、京都に豊竹座といふのが出來まして、堀江時代の兄弟子の小兵吾も入つて、私にも來

るやうに勸めるし、兄の紋五郎にも勸められたので、その氣になつて豐竹座へ入りました。その時の太夫は春子太夫さん、人形は吉田辰五郎さんで、小屋は京極にありました。私はそこで八年間勤めましたが、また座が潰れたので國へ歸ることになり、その歸り途に文樂座へ兄の紋五郎を訪ねてまゐりましたが、兄は病氣をしてゐて、口上言ひがないから、代りにやつてくれといふ話でした。でも、その時はまだ決心がつかぬので國へ歸りましたが、追つかけて兄から電報で、ぜひ來いと言つて來ましたし、續いて、兄が死んでしまひましたので、いや應なしに兄の代りに文樂へ勤めることになりました。それが大正十年で、その時は吉田文三さんの預り弟子といふことになつて、座から頂くお給金は二十五圓、ほかに文三さんから五圓づつ足してくれてゐましたから月三十圓。當時はそれだけあつたら、どうやらやつて行けました。それ以來文樂座で三十餘年間お世話になつてゐます。もつとも戰災後、文樂もやめてゐましたので、一年半ほど國へ歸つてゐましたが、また一昨年の十月から歸つてゐましたやうなわけでございます。しようもない身の上話を、ながゝと申し上げましたがでは、この邊で御注文の「堀川」の猿のお話に移りませう。

あの「堀川」の猿を遣ふのは、德丸さん（吉田德三郎、昭和十六年歿）が名人でした。私はそれを見覺え、聞き覺えてやつておりますが、德丸さんが歿くなられましたから、今では猿つかひの二代目でございます。

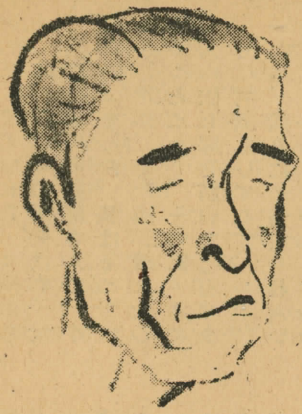
猿をつかふコツは、三味線の合ひを十分に肚に入れることで、これを呑み込まぬことにはつかえまへん。

「お猿はめでたや、めでたやナア」で、シャンときまつて「聟入り姿も、のつしりと、のつしりと、コレ……」と、この「コレ」を三味線の間に合わせて、ピシャリと一むち入れます。「コレ、さりとは、さりとは、ノウあろうかいな、サンナまた、あろうかいな」と歌の文句があるところは、その通りのつりでやればよろしいのですが、合ひの三味線のところが工夫で、なにしろ猿は始終動きまはつてゐる動物ですから、その肚で三味線の間をひろうて、にぎやかに遣ひます。この三味線の「間」ですが鶴澤と野澤では、ちよつと違ふておりまして、鶴澤の方が遣ひよいやうに思ひます。また同じ派でも、三味線ひきその人その人によつても、また少しづつ違ふたところがありまして、例えば道八さん、叶太郎さん、友造さんなどみんな少しづつ違ふておりました。山城少掾さんは遣ひよう歌うてくれはります。例えば「これこれ聟樣、あまりつれのうさんすによつて、お俊ヤアノ嫁御樣が起きさんせぬわいの、そこらでちよつと起したり、ヤそこらでチョイチョイチョイトコナと起したり、起こさんかい起こさんかい……」のあたりは、二匹の猿が藝を捨てて戯れてゐるので、與次郎は鞭でつついたりしてゐます。そこで「起こさんかい、またテンゴウしておるわいエ、起こさんかい……」となるのですが、この「エ、」をキツパリきめて語つてくださいますので、與次郎はそのキツカケで、猿の綱を引つぱ

る。猿はビツクリして與次郎の顏へ駈け上がる。與次郎はそれを拂ひのけて「これはしたり、おれの顏まで搔きおるわい」と續く手順が、その「ヱ、」の間一つで、すらすらと氣持ちよく運んで、遣ひようなります。そのやうに、人によつて少しづつ「間」も「息」もちがうもんでございますから、腹に入りつくしてゐるつもりの猿でも、出るたびに十分けいこして、呼吸を合わすことに致しております。それでも妙なもので、初日から打ち上げまで、一日として同じやうに遣えることはございません。まことに微妙なもので、その日の太夫さんや三味線の具合によつても、また合役の與次郎の具合によつても、お客さま方の氣持によつても、また遣うております自分の氣持によつても、目に見えぬちよつとしたことが影響して、ぎごちない動きになつて氣持が悪い時もあれば、すらすらと、自分ながら氣持よく、遣うてゐる猿が、まるで生きてでもゐるように思へる時もあります。こんなときは、ごはんもおいしく頂けます。

また同じ猿でも、大阪と旅先では、お客さまの氣風がちがひますから、遣ひ方も變つてまいります。東京では御褒賞まで頂いたこともありますが、どつちか言ふと、大阪でやる時よりも、少しくどい目にやつた方が受けるやうです。旅先によつては、ずいぶん、わいせつな手もやりますが、大阪ではえずくろしいて受けまへん。

あつ、次の幕があきます。ちよつと口上に行てきまつさ。（おはり）



名家探訪画帖

大矢市次郎さん

＝その七＝

繪と文

藤原せいけん